

From New York

Vol.8

世界の街の“今”を、現地からお届けします

文/FIFTH New York Office (<http://www.fifthwiki.com>)

2009年1月20日。アメリカで黒人初の大統領が誕生しました。私は、大統領就任式を毎日通うジムのトレッドミルで走りながら、テレビにくぎ付けになって見ていたことを思い出します。ジムに通うメンバー達も、パーベルを持ち上げながら大きな歓声を上げて彼にエールを送っていました。リセッションの真中にあったアメリカは「オバマ新大統領」に景気回復、雇用拡大を託し、国民の期待を一身に背負った大統領もまた、自信に満ち溢れ輝きを放っていました。

就任式から2か月前の2008年11月。大統領当選が確定したオバマ氏は勝利演説を行いました。その模様は、NYの14丁目にあるユニオン・スクエアに仮設された大スクリーンに映し出されました。

いつものユニオン・スクエアは、様々な光景が見られる場所です。週末ともなれば郊外で「グリーン・マーケット」が開かれ、収穫された野菜、果物、出来たてのパンやチーズ、有機ワインをはじめ、ハンドメイドのセーターや石鹸などが並びます。また、体中にタトゥーを入れたストリートミュージシャン達が演奏を披露したり、ホームレスはベンチの上で昼寝したりと、ニュー Yorker 達は自分のスタイルに合わせてこの広場を利用しています。

しかし、オバマ氏が勝利を決めた日のユニオン・スクエアは、いつもの姿ではありませんでした。同じ喜びを分かち合うために皆ここに集まり、アメリカ国民としてこの歴史的瞬間を見届けるという義務感と、熱狂的な勝利感を味わうために集まったのです。まるでロック・コンサートの会場にいるかのように、若い女性達までもが、オバマ氏の顔をプリントしたTシャツに身を包み、彼の演説の一言一句に陶醉していました。

あれから2年。「ヒーロー」だった彼は徐々に支持率を落としていきました。

「最も影響力のある人物」にも選ばれているコメディアン、ジョン・スチュワートが司会を務める「The Daily Show」というトークショー番組があります。彼は政治経済にも精通しており、知的でキレのいいブラックジョークを交えながらのトークで、番組は常に高視聴率を獲得しています。

その日の「The Daily Show」のゲストは中間選挙を控えたオバマ大統領でした。司会者のジョン・スチュワートの「今なら「Yes, we can……条件付きで」と言うんじゃないですか?」と言うユニカルな質問に、思わず「Yes, we can, But……」と答えてしまい、動揺を隠せなかった大統領でした。オバマ人気低迷していただけに、このコメントが中間選挙にどう響くか。既に冬の訪れを感じるNYは、政治の話で持ち切りです。

